ブンナよ、木からおりてこい

水上勉 原作・小松幹生 脚色

1

ガラスの箱に捕えられたカエル一匹。
大きな子供の手が、箱をおさえている。
子供たちの声。

声１　のん気な顔してるな、このカエル。
声２　というより、表情というものがないんだよ。考えるということがないからね。
声１　かわいそうだな。
声２　しあわせなんだよ、だから。
声１　そうかな。
声２　だってお前、考えることがなければ、悩みもなし、不安もなし、心配もなし、石っころとおんなじだ、しあわせだよ。
声１　それが、しあわせというものか。
声２　そうさ。見ろよ。

と、手がカエルを突っつく。

声２　恐怖も何もないんだから。

声１　名前もないのかな。
声２　あるわけないだろう。
声１　何が楽しみで生きてるのかね。
声２　そんなもの、あるか。
声１　じゃ、何があるんだ。
声２　本能だけだよ。
声１　ひどい生活だな、すると。
声２　バカ。しあわせなんだよ、だから。見ろ、しあわせそうな顔してるじゃないか。
声１　これが、しあわせそうな顔か。
声２　行くぞ。一匹じゃ足りないんだから。
声１　これ、どこでつかまえた？　いないんだよまだ、あんまり。
声２　それが、あのお寺の沼の椎の木に登ってたんだよ、おかしなカエル。あんなところで何してたのかな。

と、子供たちは遠ざかる。　残ったカエル一匹。

ブンナ　このぼくの顔に表情がない……目が見えないのかな、人間の子供は。死んだお母さんが言っていた。蛇もこわい、鳶(とび)もこわい、しかし、人間の子供が一番こわい。本当だ。ぼくが、石ころとおんなじだなんて。名前なんかあるわけがないだって？　教えてやろうか。ぼくの名はブンナだ。死んだお父さんが

つけてくれた名前なんだ。ちゃんと名前があるんだ。どうしてブンナというのか、それは知らない。でもぼくはブンナだ。石っころじゃない。だからジャンプだってできる。……逃げるぞ。こんなもの。大した高さじゃない。（跳ぶ。一度、二度、三度）だめだ……脚に力がはいらない。おなかの中が空っぽなんだ。冬眠から醒めて、まだ何も食べていない。残ってた力はあの椎の木のてっぺんから降りるのにすっかり使いはたしてしまった。せっかく、これで仲間のところに帰れると喜んでいたのに、そのとたんに、こんなことになるなんて。くそ！……どうだ、これでもぼくの顔は無表情だというのか？ 考えることがないというのか。悩みがないだって？ あるぞ！ 悩みだって、喜びだって、いっぱいあるんだ！……お寺の沼の夏の生活……

2

お寺の沼、夏。

読経。

カエルたちがたくさん集まっている。

読経もおわり、静かになる。

和尚さんがやってくる。

和尚　そら、おいしいパンとふとごはんつぶだ。鯉も鮒もカエルも、みんな寄っといで。（と、餌をバラまく）そうら食べろ、そうら食べろ。うばい合いをしちゃダメだよ、仲良くしなくちゃいけないよ、強い者

が食べ物を一人じめにして、弱い者を見殺しにするのは悪いことだ。強い者は弱い者をいつもかばってやらなくてはいけない。さあ、きょうは食べ物はたくさんある。仲良くするんだよ。（退場）

カエル１　きょうは説教が短かったな。
カエル２　誰も聞いてないのを知ってるんだろう、いいことだよ。
カエル１　シラケるからな、長くて非現実的な説教は。
カエル２　まったく。
カエル３　きょうの葬式は誰のだ？　知ってるか？
カエル４　知らん。
カエル３　じいさんか？　ばあさんか？
カエル４　知らん。
カエル３　子供か？
カエル４　知らんと言ってるだろ。
カエル５　人が死ぬたびに、いつもこういうことがあるといいんだがな。
カエル６　いつもじゃないのか？
カエル５　めったに無いよ、出来心だよ。たまあに、妙に心やさしい気持になる時があって、そこに偶然仲間が死んで、しんみりする、そんな時だよ、人間が他の生き物に親切にするのは。
カエル６　和尚さんもか？
カエル５　あれは商売がらみだからね。悪いことはしないが、どこまで本気でやってるかわかったものじゃ

ない。
カエル６　なるほど。
カエル７　ブンナ、おいブンナ、お前そんなところで寝てるのか？

と、呼ばれたブンナは岩の上。

ブンナ　寝てちゃいけないのかい？
カエル７　だって、いっぱい和尚さんが食べるものをくれたよ。
ブンナ　知ってるよ、ちゃんと片目をあけて見てたからね。
カエル７　じゃ、なぜ降りて来てみんなと一緒に食べないんだ、腹でもこわしてるのか？
ブンナ　おなかがいっぱいなんだ、さっき女郎蜘蛛（じょろうぐも）を丸ごと一匹食べたからね。
カエル７　え？　なにを食べたって？
ブンナ　女郎蜘蛛を食べたんだよ。

近くのカエルたち、ブンナに注目する。

ブンナ　人間のくれるパンのくずとか、ふのカケラなんて、ぼくちっともおいしいと思わないよ。女郎蜘蛛はとてもおいしいよ。ちょっとつかまえるのがむずかしいけどね。
カエル７　つかまえたのかい？

ブンナ　おいしかったよ。パンとかふと違って、なにしろ、生だからね。（歌う）

女郎蜘蛛はうまいよ
ナマだからね
つかまえるためには運が大切　運
だけど運だけじゃだめ　わかるかい
必要なのは勇気
奴は高く巣をつくるからね

女郎蜘蛛はうまいよ
ナマだからね
つかまえるためには運が大切　運
だけど運だけじゃだめ　わかるかい
必要なのは技術
奴はとてもすばしこいからね

カエルー　なに者だ、あのナマイキな子供は。
カエル２　ちょっとジャンプ力があって、ちょっと木登りがうまい、それだけだ。ブンナと言ってね、トノサマガエルさ。
カエルー　父親は？
カエル２　この春に死んだ、蛇に持ってかれてね。だから、この間までめそめそ泣いてばかりいたよ。

カエルー　母子家庭か、すると。
カエル２　いや、母親は原因不明の行方知れず、ずっと前にね。
カエルー　うらやましいね、女郎蜘蛛か。おれも若いころはつかまえたさ。
ブンナ　そういうわけだから、ぼくはここで寝ているよ。片目はあけたままでね。
カエル７　片目あけたまま？
ブンナ　あけた片目で見張りをしているからね。だからみんなゆっくりパンくず食べたり泳いだりするといい。
カエル７　大丈夫かい、片目で。
ブンナ　大丈夫。
カエル７　ほんとうかい？
ブンナ　まかしといて。
カエル７　おい、みんな、ブンナが見張りをやってくれるってさ。だから、のんびり遊べってさ。

カエルたち（大喜び）
　日ざし強き夏の
　小さな沼の木陰で
　まんぷくの腹さすり
　泳ぐこの日よ

日ざし強き夏の
風ゆらぐ水面で
仲よき友と手をとり
泳ぐこの日よ

日ざし強き夏の
光にぶき水底で
泥と遊びたわむれ
泳ぐこの日よ

ブンナ、ぴくりと耳をたてる。
頭をもたげる。
なにかが聞こえる。

ブンナ　みんな、静かにして。静かに。

不気味な音が迫ってくる。

カエルたち　蛇だ！　蛇だ！　（とロ々に）

またたく間に散って消えてしまい、あたりに誰もいなくなる。
蛇、登場。

蛇　ちくしょうめ
逃げちまいやがった 用心したのにな
汗でうろこ足がすべったんだ
もう十日も何も食ってねえ
今朝はすずめをくわえそこなった
せめてカエルでもと思ったのに
ついてねえこった
カエルなんてうまいもんじゃねえ
にわとりの卵にくらべたら話にならねえ
ちくしょうめ
カヤの葉が横っぱらをひっかきやがる
夏はあつくていやだ
腹がへるといらいらする
なにか食って昼寝でもしてえ
死んでる奴はいやだ　うまくねえ

どこへ消えたんだ
出てこいちくしょう
まあいい　また来よう
春さきにはここで
たらふくゴチになったっけ
なに、またなんとか手もあるだろうさ
へ、待ってろよ

と、蛇は去って行く。
あちら、こちらから、一匹また一匹とカエルたち姿を現わす。
じっと見送って――

カエル３　ブンナのおかげだ。
カエル４　助かった。
カエル７　ブンナありがとう。
ブンナ　いやあ……ぼくは……
カエル５　おや、謙遜するんだね。
カエル６　ハハ、もう大人だ。

と緊張がとける時、蛇の去った方角から仲間の悲鳴が――
一斉にそちらを向いて身をこわばらせる。

カエルの声　おかあさーん、おかあさーん、おかあさんが、蛇に。
誰か――誰か――助けて！　おかあさーん！（泣く）

母親ガエルの子を呼ぶ声と蛇の笑い声が交って聞こえてくる。
動かないカエルたち。

ブンナ　助けてやりたいなあ！
カエルたち（歌）
おれたちゃけっして弱虫じゃない
でもこの世はおとぎ話じゃない
弱い者は強い者に負ける
強い者はいつも無慈悲だ
蛇はカエルを食う
カエルは食われるだけだ
和尚さんはやさしい
強い者は弱い者をかばえと

教えてくれる
しかし
カエルにほほえみかける蛇がいるか
冷たく笑って食うだけだ
おれたちゃけっして弱虫じゃない
でもこの世はおとぎ話じゃない
カエルがいくら集まっても
蛇には勝てない
それが運命(さだめ)だ
できることは一つ
運をたよりに逃げるだけだ
だから、今見たことは忘れよう
泣いてみても始まらないさ
おれたちゃけっして弱虫じゃない
でもこの世はおとぎ話じゃない

ガラスの中のブンナ。

ブンナ　そうなんだ。そうなんだ。ぼくのお父さんも蛇にさらわれた。ちょうど、今のぼくみたいに、冬眠

から覚めたばかりで、身体がだるい時だったからすばしこい父さんも逃げられなかった。ぼくは見てたんだ、目の前で父さんが蛇にくわえられたのを。でもどうすることもできない。父さんは泣いてた。……それから数日、ぼくは泣いてばかりいた。何かを食べようという気もおきなかった。

3

朝。お寺の沼のほとり。
赤トンボが一匹とまって歌っている。

秋の夕日に　あ、朝日だ
照る山もみじ
濃いもうすいも　数ある中に
松をいろどる　カエデやつたは
山のふ

何かを感じて歌を中途でやめる。
ブンナたちカエルの子供らがそっと忍び寄っていたのだ。
ブンナ、赤トンボ目がけて、ひらりと飛ぶ。が、失敗。
赤トンボは別の木の枝で、

秋の夕日に　あ、朝日だ
照る山もみじ
濃いもうすいも　数ある中に
松を色どる　カエル

ブンナ再び飛ぶ。失敗。
他の子ガエルたちも、次々と飛ぶ。
みな失敗。
赤トンボ、高く遠くへ去って行く。　歌いながら――

秋の夕日に　あ、朝日だ
照る山もみじ
濃いもうすいも　数ある中に

子ガエル１　逃げられちゃった。
子ガエル２　羽があったらとつくづく思うよな、こういう時。
子ガエル３　トンボを食う権利はわれわれにはないのか、なんて悲観的になっちまうよ。
子ガエル１　ブンナなら届くと思ったのにな、そこにとまってた時。

子ガエル２　ぼくもそう思った。
ブンナ　……空が飛びたいなあ。
子ガエル３　……どうしたんだ、ブンナ。
ブンナ　飛びたいんだよ、空が。
子ガエル１　飛ぶことができれば、トンボだってつかまえられる。
子ガエル２　うまそうなトンボだったものな。ちょっと小太りで。
ブンナ　そうじゃないんだ、トンボが食べたいからじゃなくて……（空を見上げて）あ、渡り鳥。……
子ガエル３　行こう。つまらん。腹へった。われわれはカエルだ、土の上で暮すんだよ。地べたで。天をあおいで、ひっくり返るな。
ブンナ　地べたではいずり回ってるのが好きなのか？　君は。
子ガエル３　好きで、はいずり回りはしないさ、誰も。ただ、それが現実じゃないか。
ブンナ　ぼくは、地べたをはいずり回ってるようなカエルの生活に満足はできないんだよ。
子ガエル１　はいずり回る、はいずり回るって、それはちょっと表現がみじめ過ぎるよ、ちゃんと歩いてるんだから。
子ガエル２　そのとおり。
子ガエル３　いいんだよ、はいずり回っても。
子ガエル１　何をおこっているんだよ。
子ガエル３　ブンナはわれわれを軽蔑してるんだぞ。おこってあたり前だ。
ブンナ　バカを言わないでくれよ。

子ガエル３　だったら、なぜ、いつも、岩の上とか木の股(また)とか、われわれより高いところに一人で上がって偉そうな顔をしているんだ？ ちょっとジャンプ力があって、ちょっと木登りがうまい、それだけじゃないか。

ブンナ　高いところが好きだし、みんなの役にも立つから上がってるけど、誰も偉そうな顔なんかしてやしないよ。

子ガエル３　してるよ、こうやって、アゴを突きだして、ハナの先から見下ろしてるじゃないか。

ブンナ　だって、それは、そうだとしても、単なるクセで……

子ガエル３　だから、自分で気づかないうちにそういう態度をとっているところが、すなわちわれわれを軽蔑している証拠なんだよ。

子ガエル１　ちょっとそれは、いいがかりというもんだろ。

子ガエル２　そう。

子ガエル３　いや、一度言ってやろう言ってやろうと、前から思っていたんだ。みんなだって、そうじゃないか。女郎蜘蛛を取ったときのことだって、ちょっと感じ悪いって言ってたじゃないか。

子ガエル１　ま、あの時はね。

子ガエル２　ちょっとね。

子ガェル３　そら、見ろ。

子ガエル１　だからと言ってなにも、いま、藪から棒にそんなに突っかかることはないと思うよ。

子ガエル２　そうだよ。ただ、空を鳥のように飛びたいなと、そう言ってたんだから。君だって飛んでみたいだろう、空は。

子ガエル３　飛びたかないね。地べた、はいずり回ってるのが好きだ。
ブンナ　嘘をつくなよ。
子ガエル３　嘘じゃないさ、地べたがぼくたちの世界じゃないか、それを嫌いだといってどうしようというんだよ。
ブンナ　ぼくだって、何もこの世界が嫌いだと言ってるんじゃない、そうじゃなくて、地べたをはいずり回ってばかりいないで、もっと広い世界を見てみたい、そう言っているんだ。もし鳥になれたら、鳥になって空高く飛んだら、一体どんな世界が見えるだろう……見てみたいと思わないか、きみは。
子ガエル３　何も変ったものは見えやしないよ、同じ地べたがどこまでも続いているだけさ。
ブンナ　知ったかぶりはやめろよ、空を飛んだことがあるのか？
子ガエル３　夢の中で飛んだよ……何度も。
子ガエル１　……なんだ、そんなら、なにもおこることないじゃないか。夢に見るくらいなら――
子ガエル３　不可能な願いを口に出すのは、きらいなんだ、ぼくは。……

間

子ガエル３　空は飛べなくても……ブンナなら、あの木のてっぺんまで登れるだろう。あの椎の木の。登ってみるといい。空と同じくらい高い。
ブンナ　……あの、あの椎の木のてっぺん？
子ガエル３　そう。

ブンナ　登れるかなあ。てっぺん、かすんでるよ。
子ガエル３　大丈夫さ。ぼくたちとは違うんだから、君は。
ブンナ　……やってみようか。
子ガエル３　その意気だよ。
子ガエル１　大丈夫かなあ……
子ガエル２　あぶないよ、落ちたら。
ブンナ　……登ろう。登ってみるよ。

ブンナ先頭に、みな椎の木の根元に、バラバラと駆けよる。

4

一本の椎の木が、高々と聳(そび)え立っている。

子ガエル１　すごいなあ。
子ガエル２　お寺の屋根より高いぜ。
子ガエル３　高いからいいんじゃないか。
子ガエル１　登れるかなあ、しかし。

ブンナはきっと上を見上げて、意欲満々。

ブンナ　さあいくぞ。（と、いきなり、手をかけ登りはじめる）

三人の友だちの見守るなか、ブンナはズンズンと登って行く。
大胆に、のびやかに。
ちょっと足を踏みはずしたりして、友だちをびっくりさせるが、ブンナは平気である。
下から見守る仲間は少しずつ心配になってくる。
ブンナはズンズン登る。
やがて木の葉がくれに見えなくなる。
じっと見上げる三人。
ちょっと心配だ。
日がかげる。顔を見合わす三人。

子ガエル１　大丈夫かな。
子ガエル３　……大丈夫。
子ガエル２　ブンナだもんね。
子ガエル３　そう、ブンナだ。……葉っぱが光でちらちらして、見えないな、見えるか？
子ガエル１　見えない。

子ガエル２　ブンナは木の色に似てるからね。あれかな？
子ガエルー　どこ？
子ガエル２　あそこ、あの枝の左側。
子ガエル３　あれは木のコブだよ。
子ガエル２　動いたと思ったけどな。
子ガエルー　呼んでみようか。
子ガエル３　そうだな。
子ガエルー　おーい！ブンナ！
みんな　おーい！ブンナ！（返答はなし）……

そこへ年寄りのカエルがくる。

老カエル　みんなで天をあおいで、どうした？
子ガエルー　ブンナが木に登ったんだ。
老カエル　ほう。どこだ？
子ガエル２　見えないんだよ、もう。声もきこえないし。
老カエル　そんなに高く登ったのか。
子ガエル３　てっぺんまで登ったんだ。
老カエル　この椎の木のてっぺんまで？

子ガエル３　うん。てっぺんだよ。
老カエル　あぶないな……この木はずっと昔、もっと高かったが、ある時、嵐でポッキリ折れて、今のようになった。しかし、まだまだ、高いので、よくわからんが、鳶が止まるのにちょうど工合のいい感じだ。

子ガエルたち、不安になる。
こちらは木の上のブンナ。
元気いっぱい、登りつづけている。
リズミカルに――。

とうさん蛇の奴に食われて死んじゃった
かあさんずっと昔いなくなっちゃった
ひとのうわさじゃ鳶にさらわれた
手もと足もと気をつけろ
手もと足もと気をつけろ
あせるなあせるなじりじりと
あせるなあせるなじりじりと
（一休みして）あと少しだ。
とうさん死んだ時わんわん泣いちゃった
かあさん居なくなった時シクシク泣いちゃった

今も日暮れになると悲しくなるよ
手もと足もと気をつけろ
手もと足もと気をつけろ
あせるなあせるなじりじりと
あせるなあせるなじりじりと

椎の木のてっぺん。
ブンナ、じりじりと顔を出し、手をかけると、ジャンプ一番飛び上がる。
一陣の風がさっと吹き過ぎる。
太陽の光がさんさんとふりそそぐ。

ブンナ　あれ、これは、土じゃないか！ こんな木のてっぺんに土が……すごいなあ、あ、草まではえてる！……いいところだなあ。（へりまで行って下をのぞく）おーい！おーい！ てっぺんまで登ったぞう！ おーい……あれはお寺の屋根だ……（自動車の音が遠く聞こえてくる）あ、あれは自動車だ。あれか……あの道が、東京へ続く道だ。……広いなあ。山。空。きれいだ！ ハハハハハ、ついに登った。空まで登ったぞ！ ハハハハハ。（歌う）

ついに登った空の上
お寺も沼も足の下

ヘイヘイヘイ
地べたのくらしはおさらばだ
広い世界がぼくのもの

とうとう登った木のてっぺん

小川　原っぱ足の下
ヘイヘイヘイ
地べたのくらしはおさらばだ
広い世界がぼくのもの

ハハハハハ。

木の下。
ブンナが子ガエルたちに囲まれて報告している。

子ガエル１　東京が？　東京が見えたの？
ブンナ　見えたさ、広くて、でかくて、きれいで、すごいよ。ものすごい。今度は行ってみるからね、東京へ。
子ガエル２　行けるの？

ブンナ　行ける行ける。見えたんだから、あとは簡単だよ。それに、お寺の屋根がね、ちっちゃく見えたよ。きらきら光って、屋根瓦が碁盤の目みたいだった。
子ガエルー　そんなに小さく？
ブンナ　そう。
子ガエル２　すごいな。
ブンナ　すごいよ。それに自動車。知ってるか自動車？
子ガエル３　こわかったろう？
ブンナ　いや、きれいだったよ。ちっちゃくて、いろんな色をした自動車が、次から次へ行列だ、すごいよ！
子ガエルー　すごいな！
ブンナ　それに、驚くな。
子ガエル２　なに？
ブンナ　土だよ、土。木のてっぺんに土があったよ。
子ガエル２　嘘だ。
ブンナ　あったんだよ！それも、ここの地べたの土とちがって、柔かくて、あったかくて、きれいで、すごいんだ。
子ガエルー　ほんとか！
ブンナ　ほんとだよ！すごいんだ、すごいんだよ。草まではえてるんだぞ。
子ガエル２　嘘だ！

ブンナ　ほんとさ！春になると花も咲くよきっと。
子ガエルー　すごいな！
ブンナ　すごいさ！もうひとつすごいのは、風が吹いてた。
子ガエルー　ここでだって吹くよ。
ブンナ　ちがうんだよ、ここで吹くようなケチな風とは。すごいんだ、気持がよくて、あたたかくて。
子ガエル３　高いところで吹く風は冷たいんじゃないのか？
ブンナ　ちがうんだよそれが。なにしろお日さまに近いから、あたたかいんだよ。
子ガェルー　あ、そうか！
子ガエル２　すごいな！
ブンナ　すごいさ！
子ガエルー　行ってみたいな。
子ガエル２　登ってみたいな。
ブンナ　登れよ登ろうよ、一緒に行こうよ。
子ガエルー　でもな……
子ガエル２　こわいよ。
ブンナ　やってみろよ。
子ガエルー　どうする？
子ガエル３　うん……
ブンナ　君だったら途中のコブのところまでならいけると思うよ。そこまでだってけっこう広い世界が見ら

れるよ。登ってみよう。
子ガエル３　やめとくよ。
ブンナ　どうして？こわくないよ。ぼくが一緒だもの、大丈夫だよ。
子ガエル３　……
子ガエル１　登ろうか。
子ガエル２　行くか？……
ブンナ　登ろう、登れよ。

１、２、木に取りつく。
３も気のりはしないが、手をかけて上を見上げる。
１、２、そろりそろりと登り出す。

ブンナ　そう！いいぞ。あわてないで、しっかりつかまって。

１、２、つづいて落っこちる。

ブンナ　だめだな……大事なのは、よし登るんだという気持だよ。登れるかなあ、なんて弱気じゃだめだ。
もう一度。
子ガエル１　よし、登るんだ。

子ガエル２　よし、登るんだ。

登るが、すぐまた落ちる。

ブンナ　どうしてかなあ……
子ガエルー　よし、登るんだ、と気持はちゃんと持ったんだけどなあ。
子ガエル２　なあ。
ブンナ　君は？　登らないの？
子ガエル３　……登らない。
ブンナ　どうして？
子ガエル３　そのほうが、ブンナはいいんだろ？
ブンナ　え？
子ガエル３　みんなが登れないところへ自分だけ登れて、嬉しいんだろう。遠慮するよぼくは。
ブンナ　……登れないくせに。
子ガエル３　登れなくて、けっこう。
ブンナ　……残念だなあ。みんなと一緒に登ってあのすばらしい広い世界を見せてやりたかったのに。
子ガエル３　行こう、みんな。
ブンナ　ぼくはまた登るよ。いいところだからね。別荘にしてもいいと思ってるくらいだ。
子ガエルー　それはやめたほうがいいよ。

ブンナ　なぜだい？
子ガエル１　鳶がくるかもしれないって、おじいさんが言ってた。
子ガエル２　言ってた。
ブンナ　大丈夫だよ、鳶が来たら土にもぐればいいんだから。土はけっこう深いんだよ。
子ガエル３　行くぞ。行こう。

去っていく仲間を一人見送るブンナ。

5

ガラスの中のブンナ。
鳶の鳴き声。

ブンナ　あっ鳶だ……あの鳶だろうか……

子供たちがやってきた。
手がガラスをおさえる。
カエルが新たに三匹放りこまれる。

声１　おっ、見つめ合ってるぜ。知り合いかな。

声２　まさか。みんなおんなじ顔してるじゃないか。どれもこれもないよ。
声１　どうする？
声２　もういいだろう、足りるよ。
声１　逃げないだろうな。
声２　大丈夫さ。ガラスはすべるからな。
声１　あさってだっけ、理科の時間は？
声２　そう。死刑のとき。ハハ。
声１　ハハハ。

子供たち、遠ざかる。

子ガエル３　……やっぱりブンナ……ブンナだ！（と互いに抱き合う）
子ガエル２　生きてたのか、ブンナ……よかったなあ。
老ガエル　いつ、あの椎の木から降りて来た？てっきり鳶にさらわれたと思ったのに。それとも、ほんとうは登らなかったのか？
ブンナ　今朝おりて来たんです。
子ガエル３　けさ？
子ガエル２　きょうの朝？
ブンナ　うん、そうだよ。もうすぐ地面だというとき、子供につかまったんだ。

子ガエル３　……じゃ、木の上で……？
子ガエル２　冬を過ごした……？
老ガエル　運の強い子だ。
ブンナ　でも、降りたとたんに、このありさまです。
子ガエル２　逃げられないのか、ここから。（ガラスの壁面にさわってみる）……
子ガエル３　（叩いてみる）……上は？　あいてるじゃないか。よし。（ジャンプする。とどかない）
子ガエル２　（跳んでみる。ダメである）
子ガエル３　ブンナ……？
ブンナ　やってみた。
子ガエル３　だめか……
老ガエル　なに、そのうち、なんとかなるさ。あせるな。
子ガエル２　でも、どうやって？
老ガエル　それをゆっくり考える。
子ガエル２　ぼくは冬眠からさめて、まだ何も食べてないんだ。
子ガエル３　ぼくもだ。
子ガエル２　だから、考えるったって、時間がたてばたつほど体のほうがいうことをきかなくなるよ。
老ガエル　ブンナ、椎の木の上で、いったいどんなことが起きたんだ？　話してくれないか。
子ガエル３　そうだ、みなで肩車しよう。誰かが下にうずくまって、順に上に乗るんだ。そうすれば、きっと届くよ。

子ガエル２　誰が一番下になるんだよ。つぶれちまうぞ。
子ガエル３　大丈夫だよ。ちょっとの間だ。
子ガエル２　じゃ、お前下になれよ。
子ガエル３　……ぼくは、あんまり大きくないし……
子ガエル２　そら見ろ。
老ガエル　ブンナ、話を聞きたいな。聞かせてくれ。あの木の上で、どんなことがあった。
子ガエル３　おじいさん、今はそんな話を聞いてるときじゃないですよ。
子ガエル２　そうだよ。逃げることを考えなくちゃ。
老ガエル　お前たちも、あの椎の木に登ってみたかったんだろう？　そうだろう？　どうだ？
子ガエル３　……
子ガエル２　……

6

椎の木のてっぺん
夕ぐれどき。
すずめが二羽とまっている。

すずめー　少し肌寒くなったみたいだね。

すずめ２　秋だからね。
すずめ１　夜が近いからだよ。
すずめ２　いや、秋のせいだろ。
すずめ１　夜の近いせい。
すずめ２　ま、いいだろう。
すずめ１　そろそろ家に帰って寝なくちゃね。
すずめ２　眠たいのかい？
すずめ１　眠たくないけどね。
すずめ２　じゃ、もうちょっと居ようよ。
すずめ１　こんなところで、なにするんだい？
すずめ２　……
すずめ１　君よりほかに話し相手はいないよ。
すずめ２　じゃ、もっと居ようよ。
すずめ１　でも、われわれは、ほら、鳥目だし。
すずめ２　あ、そうだったね、忘れてた。

このとき、てっぺんのへりに手が出て頭がつづいて現われる。
ブンナだ。すずめたちと目が合う。

すずめー　カエルかい？　あれは。
すずめ２　カエルというのは、羽があったっけ。
すずめーない、と思ったよ。
すずめ２　じゃ、百舌（もず）にでも連れてこられたのかな。
すずめー　でも、生きてるみたいだよ。
ブンナ　すずめくん、こんばんは。
すずめ２　あれ、口をきいたよ。
すずめー　それはいいとして、くんづけで呼んだよ。
ブンナ　こんばんは、すずめさん。
すずめ２　こんばんは、カエルくん。
すずめー　こんばんは、カエルくん。
すずめ２　いいのかい、われわれはくんづけで。
すずめー　むこうが年下だからね。
ブンナ　上がっていいでしょうか？
すずめー　もちろん、かまわないけど、なにしに来たんだい？　こんな高いところに。
ブンナ　朝、一度登って来たんです。
すずめー　そのとき、忘れ物でもしたのかい？
ブンナ　いえ、あんまり気持のいいところだったから、今度はここで一晩過ごしてみようかなと思ったんです。

すずめー　どうすんの、そんなことして？
ブンナ　どうするって、別に……ただ、ぼくは、すずめさんたちのように、空を飛んでみたいなと、いつも思ってたんです。
すずめー　なぜ？
ブンナ　だって、広いきれいな空を、あんなに気持よく飛べたら、どんなにすばらしいかと思って。
すずめー　すばらしいってさ、空が。
すずめ２　へえ。そうかね。
ブンナ　だって、すばらしいじゃないですか。地べたとちがって、空は、高いし、広いし、風が吹いて、気持いいでしょう。
すずめー　まるで、われわれが空にぽっかり浮いてるみたいなこと言ってるよ。
すずめ２　物を知らなすぎるね。
すずめー　いいかい、われわれはね、飛んでるのよ、浮かんでるんじゃないの、羽を動かしてるわけ、バタバタバタバタバタバタ、休みなしだよ。判る？　休みなし。君たちのようにさ、のそりと歩いては居眠りするというわけにはいかないんだよ。飛んでて眠ったらおしまいだよ、落っこちちゃうんだから。判るかい？
ブンナ　でも、広々とした空を好きかってにどこへだって飛べるし、いろんな珍しい物が見られるでしょう。
すずめー　いや、だからさ、景色が見たくて飛んでるんじゃないよわれわれは。虫を取って食べたり、それから虫を探してたり、なにかほかに食べる物はないかと、うろうろしてたり、いつもそれだよ。遊んでる

んじゃないんだから、生活してるんだよ、生活。
すずめ２　そう、生活だよ。
すずめー　だからさ、こうやって木とか屋根なんかにとまってる時、これがまあ、やっとの思いのひと休みさ。だって君、このあたりにだって鳶がいるよ。大空をのんびり飛んでられるのは鳶の奴くらいさ。こっちはいつもびくびくしてるんだ。冗談じゃないよ、まったく。空が飛んでみたいだって？　こっちは地べたでのんびりくらしたいよ。丈夫な足が四本もあってさ。うらやましいよ。その顔の近くにあるのも足なんだろう？　羽じゃないだろう？　歩くのに使えるんだろう。
ブンナ　ぼくは、これが羽だったら、どんなにいいかと思います。
すずめー　聞いたか。
すずめ２　聞いた。
すずめー　ばかだね。
すずめ２　ばかだ。
すずめー　行こうか。
すずめ２　行こう。
すずめー　もう、目が見えなくなりそうだね。
すずめ２　鳥目だからね、われわれは。
すずめー　行こう。
すずめ２　行こう。

見送って、ブンナ、クシャミをする。
急にあたりが暗くなったようだ。
「ホー、ホー」と声がする。
びくりとするブンナ。
「ホー、ホー」
隠れる所がなくてうろうろするが、あわてて穴を掘りはじめる。

みみずく　ほうほう　のりつけほうせ
　　ほうほう　のりつけほうせ
なにをあわててていなさるのかな、ぼっちゃん。ごらん、きれいな月だよ。（大きな月が出る）……そして、星だ。（満天、星だらけとなる）……今夜は土にもぐって早く寝て、あした朝すぐ下りたほうがよい。なお、明日は晴れである。以上お知らせいたします。では。
ほうほう　のりつけほうせ
ほうほう　のりつけほうせ（去る）
ブンナ　びっくりした。あれがお母さんの話してたみみずくか。……（天をあおいで）きれいだな。

7

しばらく夜空の美しさにみとれて、やがて土の下にもぐって眠る。

朝である。
バサバサバサと不吉な羽の音。
こころよい夢を破られて、きょろきょろするブンナ。
鳶の大きな脚が二本、ぐいとへりをつかんでおり立つ。
土がぐらりとゆれて、静かになる。
ブンナ、耳をすましていたが、そろりそろりとはい出す。
土から頭だけ出して、あたりを見まわす。
鳶の脚に気づき、びっくりぎょうてん。さっと頭をひっこめる。土の底までもぐりこみ、ふるえている。
また土がぐらりとゆれて飛び立つ鳶。
しばし不気味な静寂。
ブンナが動き出そうとする時、ふたたび鳶の羽音がして、あたりが暗くなると、バサリ、パサリと何かが落ちた音がする。鳶は遠ざかったようだ。
土の上に二つの物体が動く。
うめき声が聞こえる。
一つはすずめである。
すずめ、そこにいる百舌に気づいてあとずさり。

すずめ　百舌だ。……百舌さん、百舌さん。
百舌　ええ？ 誰だ……ああ、痛え。（じろりとすずめを見る）
すずめ　百舌さんも、鳶に連れて来られたんですか。痛いですか。
百舌　……（にらみつけていたが）さんづけはやめろよ。
すずめ　え？
百舌　百舌さんなどと言うなといってるんだよ。ああ、痛い……
すずめ　どこをやられたんですか。
百舌　……嘴（くちばし）だよ、折れちまってる。だから食いたくても食えないんだから安心しなよ。……お世辞をいう奴は大嫌いだ。なにが百舌さんだ、バカやろう……。くそ！
すずめ　そんなこと言っても、いつもわたしたちの仲間は百舌さんたちに襲われていて、それで、だから……
百舌　おれにお世辞を使って、どうなるというんだ？ ここは鳶のエサの中継所だろう……（間）お前もおれも間もなく奴のねぐらに運ばれて、食われるんだぞ。お互いに同じエサの身の上だ。お世辞を使うなら、鳶に向って使え。
すずめ　……（泣いている）
百舌　……バカだなあ。どこでぼんやりしてたんだ？
すずめ　朝からいいお天気で、あんまり気持がいいものだから、お寺の屋根の鬼瓦にとまってチュンチュンやってたんです。よせばいいのにそれも一人で。百舌さんならいいけど、すずめの分際で鬼瓦なんかに登ったのがいけなかったんです。

百舌　バカやろう。誰だって登りたいところに登っていいんだよ。何いってるんだ。
すずめ　でも、あんなところに一人で登りさえしなければと思うと……。
百舌　いまさら泣きごとはよせ。
すずめ　百舌さん元気なんですね。それくらいなら逃げられるんじゃないですか。
百舌　元気なもんか。ただ、ひとに弱みを見せたくないだけさ。見ろよ、首のうしろに穴があいているだろう、鳶のやろうが、嘴で一突きしやがった。電線にとまってぼんやりしてたんだ。半分気を失って地べたに落ちて嘴を折ったところをつかみ上げられて、空中高くから投げ落とされてさ、それも三度だ。肋骨が三、四本折れちまった。身体を動かそうとすると息が苦しい。もうおしまいだよ。……たった二年だぜ、生まれてから。
すずめ　……
百舌　なんで、あのとき……ちくしょう。
すずめ　みんなと一緒にいさえすれば、こんなことにはならなかったんです。
百舌　みんなと？　そういうことなら、みんなを呼んで助けてもらえよ。
すずめ　だめです。鳶のツメにつかまれて、羽のつけ根が折れてしまったんです。もうおしまいです。助けに来てもらっても飛ぶことができないんです。
百舌　助けに来てもらってもたって、誰も助けになんか来やしないよ、われわれはみんな一人ぼっちなんだ。おふくろが、ちゃんとそう教えてくれた。大勢で群れてたって、ただ食べ物が少なくなるだけでなんのいいこともありはしない、それに問題はそんな食べ物のことではない。生きていくことの厳しさを知るということだ。しょせん、結局のところ一人ぼっちであるからには、自分で覚悟を決めていつも一人でい

るようにすることだ。一人でいるのが淋しいからといって仲間と群れても本当の淋しさが和らぐものではない。もし和らぐように感じたとしたら、それは錯覚にすぎないし、その証拠には、死ぬときは必ず一人だ。そして、一人で死ななくてはならないときが来て、いやというほど孤独が身にしみるものだ。だから、最後の日のために、いつも一人でいるようにしたほうがよいのだ。おふくろは、おれにそう言って、どっかへ行ってしまった。すずめの捕り方、カエルやトカゲの殺し方、そんなことを全部ひととおり教えてくれたあとだった。短い間だったけど、やさしい、おふくろだった。……ちくしょう涙がでてくらあ。

すずめ　どうして鳶はわれわれを食べるんでしょうね。草とか、お米を食べていればいいのに。ひどいですよ。

百舌　因果はめぐる風車っていうじゃないか。おれだって、すずめを食う、トカゲを食う、カエルを食う、まだまだほかにも生きてる奴を殺して食うよ。食われる奴は泣いてるよ、判ってらあ、そんなことは。でも、しょうがねえじゃねえか、食わなきゃ生きちゃいけないんだから。鳶だって同じだ、おれたちを食う、しょうがねえだろう、それが運命じゃないか。

すずめ　そんなこと言ったって、じゃあ、ぼくらすずめは、食われるだけじゃないですか。

百舌　何いってるんだ、お前らだって、蝿（はえ）とか蚊を食うだろう。

すずめ　だって、あれは、虫ですよ。

百舌　虫は、生き物じゃないのか？

すずめ　そりゃあ……だって、とても小さいし……

百舌　一寸の虫にも五分の魂ってね、おあつらえ向きの格言がある。

すずめ　でも、それは要するに、単なるたとえであって、あの小さな虫の身体の半分も魂がつまってるなんて、考えられないですよ。そんなこと考えたら、だって食べられないじゃないですか。
百舌　しあわせな奴だよ、お前さんは。
すずめ　だって、やっぱり変ですよ。このぼくと、あのちっちゃな虫ケラとがおんなじような魂を持った生き物だなんて。ぼくは、ぼくで、あれは食べ物ですよ。そうでしょう？
百舌　鳶の奴もそういってるよ。おれはおれだが、あのすずめは、おれの食い物だってね。
すずめ　いや、それはおかしいですよ、あのすずめであるところの、このぼくは、ぼくであって、食べ物ではないんだから。
百舌　バカだな、お前は。食い物じゃないのなんの言ってみたって、これから食われようとしているところじゃないか。そうだろう。逃げることができるか。できないじゃないか。
すずめ　百舌さんは、平気なんですか？
百舌　……
すずめ　ぼくはいやだ、食われるのはいやだ。死にたくない……
百舌　無駄だよ、泣いたって。……やめろよ恥かしい。死に際はもっとさっぱりとするもんだぜ。鳶だってこうやって、しばしの間われわれをこの日だまりの中に生かしておいてくれてるんだ。そのことに感謝して、すぎとし日々の追憶にでもひたるんだな。もうちょっとだぜ、生きてられるのは。
すずめ　なにか、鳶さんに許してもらう方法はないでしょうか。
百舌　ないね。
すずめ　ぼくの代わりにほかの何かを食ってもらうとか……

百舌　何か持ち合せでもあるのか？ 蝿とか蚊みたいなちっちゃいものはだめだぜ、せめてカエルぐらいじゃないとな。
すずめ　……そうだ。カエルだ。（あわてて、あたりを見回す）
百舌　どうした？
すずめ　どこへ隠れたんだ、あのカエルは。
百舌　なにを探してる？ カエルがいるのか？
すずめ　いたんですよ、タベ、カエルが、ここに。
百舌　鳶に連れてこられたのなら、もうねぐらまで運ばれたんじゃないか。それに、そういうことなら、お前の命と交換とはいかないじゃないか。
すずめ　いや、ちがうんです。ひとりで登ってきてたんですよ、カエルが。
百舌　まさか。
すずめ　ほんとです。口まできいたんだから。暗くなって下りられるわけはなし、夜があけてまだ間はなし、どこかに隠れてるんだ……そうだ、土の中だ！ カエルは土の中にもぐるんだ。……ちくしょう。
（夢中で土をほじくろうとする）
百舌　やめろよ……やめろ……無理だよ、お前に土は掘れないよ。
すずめ　百舌さんも手伝って下さいよ、ね、たのみます。（掘ろうともがいている）たのむよ！ 助けてくれよ！ 出てこい、出てこい、カエルー
百舌　お前は、自分が助かるために、カエルの命を犠牲にしようってのか？ 恥かしいとは思わないのか？
すずめ　ねえ、カエルさん、出て来てくれたらね、君の大好物のクモをあげるよ、ほら、ここにぼくがク

モを取って持ってるんだよ、おいしいよ、……ねえ、出ておいでよ、ねえ……出てこーい！ ちくしょう！

百舌　……死んだほうがましだな、お前は……殺してやろうか、おれが。

すずめ　……なぜ、生きたいと思うことが恥かしいことなんでしょうか。

百舌　まさか説明してくれと言うんじゃないだろうな。

すずめ　百舌さんは生きていたくないんですか。

百舌　恥かしいことまでして生きていたいとは思わないね。これから間もなく死ぬんだとはっきり判る時間が持ててよかったと思ってるよ。おれの知ってる奴なんか、木の上 にとまっていて人間の空気銃に撃たれて、アッという間に死んじまった。もう雪がまっ白くつもった冬だったよ。白い雪を血でまっ赤にそめて、羽をバサリとひろげて首ねじまげて、ぴくりともしなかった。奴はだから自分が死んだことも知らないんだ。たよりないと思わないか。

すずめ　……

百舌　元気を出しなよ。少なくとも先に連れてかれるのはおれなんだから。

すずめ　どうして、そんなことが判るんです？

百舌　先に死にそうな奴から食うもんなんだよ。死んじまうとすぐ腐って食えなくなるからね。

すずめ　でも百舌さん、ぼくより元気じゃないですか。

百舌　口先だけだ。

すずめ　……

百舌　少しは落ちついたか？

すずめ　……ああ、死にたくない。生きて、もう一度春をむかえて、ヒナをかえしたい。死にたくないんだ……

百舌　鳶の先生に、じゃそう言って頼んでみるこったな。ハハ。

すずめ　……（天をあおいで）来た。……

百舌　まだだよ……まだ早いよ……早すぎるよ……

バサバサバサバサと不気味な羽音が迫る。

百舌　待てよ、待ってくれよ……まだダメだよ、いけないよ、早すぎるよ、待ってくれよ！（つかまれる）まだだよ！まだいやだよ！助けてくれ！ああ……（悲鳴とともに消えてゆく）

雀は小さくなってふるえていた。

鳶が去ってあたりが静かになると、雀はなんとかして逃げられないかと羽を動かし、もがく。

すずめ　……だめだ。羽がいうことをきかない。（淋しく泣く）……（やがて）カエルさん、いるんだろう？聞こえているんだろう、カエルさん……さっきは、ごめんね、あやまるよ、……許してくれるね。ぼくはさっき、すっかり我れを忘れてたんだ、まったくどうかしてた。でも、もう大丈夫、悲しいけど、落ちついたよ。……聞いていてくれるかい？ぼくはね、そんなひどい奴じゃないんだ。ただ、弱いだけなんだ。弱いってことは悪いことじゃないだろう？それはカエルさんには判るよね。弱いってことを責

められたんでは、なんとも、どうしようもないものね。……カエルさん、一人なんだろう？ ねえ、出てこないかい。ぼくも一人なんだ。……出てくるのがいやなら、ねえ、せめて、なんとか言ってくれよ、いるんだろう、そこに。……頼むよ、 出てきてくれよ。ひと言でも喋ってくれよ。そうでないとぼくは、とてもみじめな気持がしてやりきれないよ。……カエルさん！ ……カエルさんよう！

ブンナ、思いきって外に出てゆこうかと動く。それまでにも何度か心を動かしていたが。

8

ガラスの中のブンナたち。

子ガエル２　百舌といい、すずめといい、鳥って奴はみんないやな連中だな。情けないよ。えらそうな顔をして、いつも、ぼくたちをいじめているくせに。泣いたのか、死に際になって。ぼくは泣かないぞ。

子ガエル３　まだ死に際じゃないよ。

子ガエル２　逃げ出そうよ、早く。話はあとで聞くよ。ジャンケンしよう、みんなで。

子ガエル３　ジャンケン？

子ガエル２　逃げ出す方法は、さっき君の言った方法しかない。その際、だれが一番下になるか、そして誰が一番上にのるか、それをジャンケンで決めるんだ。どうだ？ いいだろう。ね、おじいさん、おじいさんは、一番下は無理だし、一番上も無理だからいいよ。ね、早くジャンケンしよう。さあ。

老ガエル　雨が降るかもしれない。雨が降って、このガラスの箱に水がたまれば……逃げ出せる。
子ガエル３　降るかな、雨。
老ガエル　いつか必ず降る。
子ガエル２　いつかなんて、そんな……
老ガエル　時はまだある。
子ガエル２　どうしてそう言える？
老ガエル　……
ブンナ　さっき子供たちが言ってなかったかい、何か？
子ガエル３　……そうだ。
子ガエル２　どうした？
子ガエル３　あさってまでの命とか……
子ガエル２　あさって？　そんな……
老ガエル　ということは、きょうもあすも大丈夫だということだ。さあ、話のつづきを聞こう。
子ガエル２　もうやめよう。それより、考えようよ、逃げることを。
老ガエル　いや、ブンナの木の上での話が、われわれみんながここから逃げだすために、何だか役に立つよ
　うな、そんな気がするんだ。だから、ブンナ、話してくれ。
ブンナ　はい。
老ガエル　お前は、それから、すずめに声をかけてやったのか？
ブンナ　そうしようと思ったんです。でもさっと飛び出すことができない。気持は動いても体が動こうとし

ない。怒っていたわけじゃない。怖いという気持も消えていた。迷ったり考えこんだりなんてにがてだ、好きじゃないけど、あの時ぼくは考えこんでた。出ようか出まいか考えたわけじゃない。出て行って話し相手になってやりたい気持もあった。でもどちらにしようか考えたんじゃない。確かに覚えているのは、いったい自分は何を考えているんだと考えたことだ。とても悲しかった。父さんや母さんが死んだ時の悲しさとはまったく違う。そう思う。ぼくだって生きてる物をとって食べる。でも食べられるのはいやだ。そんなことを考えたってしょうがない。スズメはひどい奴だ。それでいいじゃないか。スズメの身になったって、しかたがない。でも、どうしようもなく悲しい。だから出て行きたかった。出て行こうとして体が動かなかったのは、ぼくにはよくわからない。怖かったんじゃない。恐ろしいという気持はその時は消えていた。

9

椎の木のてっぺん。

ピーヒョロ、ピーヒョロと鳶の鳴く声が聞こえる。

外に出ようとしたブンナは、またうずくまる。

雀が悲鳴をあげて暴れる。

大きな羽音が近づいて、また何かがドサッと落ちてくる。

ねずみである。

あたりを見回してすずめに気づく。

ねずみ　こんなところで、なんで転がっているんだ？　すずめだろう？　きみは。
すずめ　……
ねずみ　羽根があるんだろ？
すずめ　……
ねずみ　……（じろじろと見る）
すずめ　食べないでね、ねずみさん、ぼくを食べないでね。もしどうしてもお腹が空いてるのなら、土を掘ってみるといいよ、何かいるかもしれないから。
ねずみ　……みたところ、きみも鳶に持ってこられたんだろうに、なんだい、その食べないでねってのは。
すずめ　……
ねずみ　逃げられないのかい、羽根があるのに。
すずめ　折れてしまってるんです、つけ根のところが。
ねずみ　……（真正面からじろじろと見る。それがこのねずみのくせか）心配しなくてもいいよ。もっとも、おそかれ早かれ鳶に食われるのに、心配するなもくそもないよな。ハハ。あいた。笑うと、脇腹がいたい、骨が折れて腹の中に突き刺さってるんだ、地面に叩きつけられたからな。（自嘲して）寺の裏のドブで水を飲もうとしてたんだ、モチを食い過ぎてさ、あれだ、寺の仏さんにそなえてあるモチだ、うまかったのはいいが欲ばって食い過ぎて、足元がよたよたするうえに、ノドがかわいたものだから、水を飲むことばかり考えて、鳶がすぐ近くにいることに気がつかなかった。バカな話さ。奴め、さっと低空飛行で突っこんできやがった、ずんと背中を一撃されてひっくり返ったところを、ガシッとつかまれて空の上か

ら叩きつけられたんだ。奴の目がにやっと笑ってたよ、まあさ、叩きつけられても、くたばらなかった俺に半ば感心したのかもしれないが、いやな笑い方だった。……おれも、しかし、よく観察してるよな、ハハ。

すずめ　……

ねずみ　ノドがかわいたよ。飲んでないんだよ、結局。水がほしいな。……

すずめ　……食べたいんだったら、土を掘ると何かあるかもしれませんよ。

ねずみ　腹はいっぱいだ。……おれ、食いたそうな顔してるか？

すずめ　……いや

ねずみ　まだ心配してるのか。食やしないよ。……でも、食ってみると、うまそうな感じがしないでもない　な。え、おい。

すずめ　……

ねずみ　ハハ、冗談だよ。いてえ、いていていていていて……おう痛え、おう痛え。

すずめ　……

ねずみ　……

すずめ　ねずみさん、ぼくは死にたくないんです。

ねずみ　誰だって死にたくないよ。

すずめ　（小声で）一つ方法があると思うんです。われわれのかわりに、何か別の、たとえば、カエルを鳶　さんにあげたら、許してくれるんじゃないか。

ねずみ　……（じっと見ている）

すずめ　いるんです、カエルが、この土の下に。間違いないです。でも、ぼくには掘ることができないんです。……

ねずみ　おれに、掘ってくれと？

すずめ　もしかしたら、うまく行くかもしれない……

ねずみ　……君の気持は判るけど、無駄だ。そんな、物判りのいい鳶がいたら、お目にかかりたいね。

すずめ　やってみなくちゃわからないじゃないですか。

ねずみ　だめだ。無駄と判っていることに苦労はしたくない。君は鳶というものを甘く見てる。奴は一度捕えたものは逃さないよ。奴から逃げるにはたった一つの方法しかない。……死ぬことさ。……死ねば奴は食わないんだ。

すずめ　……（うずくまる。泣いているのかもしれない）

ねずみ　……なんで仏さんのおモチなんか食ったのかな。バチが当っちまった。もっとも、それだけじゃない、生まれたときからずっと悪いことのしつづけだ。なあ、すずめ君、そうなんだよ。生きるために、いろんな物を盗んで食うのは仕方がないとしても、いつも仲間には分けてやらず一人じめにした、仲間が何か手に入れたときは、おどしつけて、かすめ取った、鳶はそれを知ってたのかな。おれの人相、あまり良くないだろう、それで、あいつ、にやっと笑ったのかもしれない。……バチが当ったんだと思うよ、結局。

すずめ　そんな、いくら反省して見せたって誰も聞いてやしないですよ、助けてくれやしないですよ。

ねずみ　何もひとに聞かせようと思って言ってるんじゃないよ。

すずめ　じゃ、声に出さないで、しゃべって下さい。

ねずみ　なにを怒っているんだい？
すずめ　……
ねずみ　……日が、かげってきた。黄色く赤く色づいた葉っぱが、次々と落ちていく、もう秋も終りなんだ、おれのいのちの終りと同じだ。黄色だ赤だといっても、ちっともきれいじゃない。枯れて死んでくさって行くんだからな。日が落ちてこれで風でも吹いてきたひには、カサコソと枯葉が舞ったりして、ああ、いやだな。
すずめ　……
ねずみ　ノドがかわいたな、水がのみたい。
すずめ　やがて死のうという身で、水をのんでもしょうがないでしょう。
ねずみ　そりゃそうだな。

間

ねずみ　なるほどね、話には聞いていたが、ここが鳶のエサの取りつぎ所か。奴は貪欲だから、取れるときに次々に獲物を半殺しにして捕まえて、中継所において、弱った奴からねぐらへ持って行って殺す、一匹取ってそのたびにねぐらに運んでると能率が悪いと、そういうわけらしい。悪い奴は頭がいい。
すずめ　こんどは、やっぱり、ぼくの番だろうか……
ねずみ　……
すずめ　ぼくは、間もなく鳶に食われるのかと思うと、たまらない……おそろしい……

ねずみ　死ぬ間際に、しなくちゃならないことは、泣くことじゃない、せめて、今までの自分の人生を振り返って、懺悔することはして、きれいな心になることさ。
すずめ　そんなことしたって、何の役に立つんです？　それで命が助かるんですか？　鳶がそれを聞いて、うん、感心な奴だ、助けてやろうなんて思ってくれるんですか。
ねずみ　判らない奴だな。
すずめ　判りませんね、そんな、おかしな理屈は。
ねずみ　じゃ、泣きわめいて、みじめな気持で死んでいくんだな。
すずめ　いやだ！　死ぬのはいやだ！　なんでぼくが鳶に食われて死ななきゃいけないんだ、どんな悪いことをしたというんだ。
ねずみ　君は、何年生きた？
すずめ　……三年。三年だ、たった。
ねずみ　いいじゃないか三年生きられれば。生まれてまだ何も見ないうちに死んでいく可哀そうな奴にくらべたら、君は、きれいな青い空の下で思いっきり唄ったろう。飛び回ったろう、友だちと遊んだろう、子供だって育てたろう、おいしい物も食べたろう。どうだ、ちがうか。
すずめ　だって……たった三年ぽっちだ。まだ、ぼくは生きていたい、生きていたいんだ。
ねずみ　もう死ぬことに決まったんだよ、判らないのか、それが。
すずめ　……カエルを、カエルの奴を掘り出して、それで――
ねずま　ばかやろう！　まだ、そんなこと言っているのか。
すずめ　……

ねずみ　……君は何も悪いことはしていないと言ったが、死に際になって、ひどいことをしようとしている。もし、ほんとうに、この土の下にカエルがいるとしたら、今、そのカエルは、どんな気持で君の言葉を聞いたか、考えてみろ。

すずめ　ぼくは、ひとの気持を考えてられるほど余裕もないし、強くもない。ねずみさんや百舌さんとはちがうんだ。……ぼくは表面だけ立派なふりをして、弱いほんとうの自分を隠して、かっこうをつけるのは、きらいだ。

ねずみ　……きさま……

すずめ　百舌さん、ねずみさんと同じようなことを、ぼくに言った。……でも、泣きわめいて行ったよ、死にたくない、死にたくない、助けてくれってね。それがほんとうの姿なんだ。そうでしょう？　ちがいますか。

ねずみ　……おれは、いやだな、そういうのは。……どんな悪いことをして生きてきても、死ぬときは、きれいにしたい。もし、ほんとうの死に際に泣きわめくことになるとしても、それは、ほんとうのおれじゃない、ほんとうのおれというのは、おれが、こうありたいと思ってるおれなんだ。百舌の奴が、死にたくない、死にたくないと泣いたとしても、泣きながら百舌は、泣いてる自分を恥かしいと思ったに違いない。

すずめ　そんな余裕なんかなかったですよ。ただ、泣きわめいていたよ。

ねずみ　余裕があるかどうかの問題じゃない、哲学だよ。

「ピーヒョロ、ピーヒョロ」と鳶の声がする。

びくっと声のするほうを見る、ねずみとすずめ。

すずめ　来るよ……どうしよう……

ねずみ　観念しろ……観念するんだ……おれが持ってかれるかもしれない……

バサバサバサと羽音が近づくと、悲鳴をあげるすずめとねずみ。

鳶がそのツメの足を現わして、とまる。

ねずみ　おれじゃないぞ、おれの番じゃないぞ。すずめの番だ、奴を持ってってくれ、おれじゃない！　おれじゃない！　いやだよう！　だめだよう！

鳶は、すずめをつかんで飛んで行く。すずめの泣き声が尾をひいて――。

のこされたねずみ一匹。

ねずみ　（顔をあげ、助かった自分を知る）……ああ！……（土を両手で叩いてなげく）　ああ！……死んだほうがましだ……死んだほうがましだ……

泣きつづけるねずみ。

ブンナは声をかけてやりたくて、たまらなくなる。

ブンナ　ねずみさん、ねずみさん……ねずみさん。

ねずみは、しかし、その声に気がつかないで、泣いている。

10

みみずくが来ている。夜になった。

みみずく　ほうほう　のりつけほうせ
　　ほうほう　のりつけほうせ
今夜は月が出ます。ただし、雲も流れております。暗くて明るく、明るくて暗い。なお、明日は雨が降るでしょう。以上。
ほうほう　のりつけほうせ
いや、のりをつけて干すわけには参りませんでした。晴れではありませんから。訂正いたします。
ほうほう　のりつけほすな
ほうほう　のりつけほすな（去る）
ブンナ　（顔を出して）ねずみさん、ねずみさん。
ねずみ　……カエル君、きみは、やっぱりいたんだね。

ブンナ　ねずみさん、月が出ましたよ、鳶は鳥だから、夜は目が見えません、ねぐらに帰って寝ています。
　ねずみさんは、でも、月が出ているんだから見えるでしょう。今なら、逃げられますよ、逃げて下さい。
ねずみ　月が……？
ブンナ　ええ、みみずくさんが教えてくれました。
ねずみ　ほんとだ、月が出ている。
ブンナ　足は折れてはいないって言ってたでしょう。逃げられますよ、きっと。
ねずみ　……落ちるかもしれない。
ブンナ　ここにじっとしてたら、鳶に食われて死ぬだけです。それなら、危険をおかしても、やってみたほうがいいに決まっています。
ねずみ　……そうだな。やってみようか。
ブンナ　そうですよ、やってみるんですよ。
ねずみ　ありがとう、君に教えてもらわなかったら、月が出たことにも気がつかなかった。
ブンナ　お礼はみみずくのおじさんに言って下さい。
ねずみ　ありがとう。（へりに身をのりだす）……カエル君、君はいかないのか？
ブンナ　ぼくは、木に登るのも降りるのも、ほんとは得意じゃないから、もっと明るいときを待ちます。ねずみさんは、明日になれば鳶に連れて行かれることは決まっているから、今夜しかありません。でも、ぼくは鳶には知られてないんだから、まだチャンスがあります、だから、もっとここで頑張ります。
ねずみ　よし。……じゃ、行くよ。
ブンナ　気をつけて下さい。雲が出ているそうだから、暗くなるかもしれません、そのときは、明るくなる

まで、じっとしていたほうがいいですよ。あせらないで。
ねずみ　判った。……ありがとう。（降りようと、へりを越え、頭だけこちらに残ったところで）じゃ、カエル君、幸運をいのるよ。
ブンナ　ねずみさんも！
ねずみ　うん。（消える）
ブンナ　あせらないで！

ブンナ、へりまで行って下を見下ろす。月が、やがて、雲に隠れる。

ブンナ　あ、暗くなった……神さま！……

間
「ああ！」とねずみの悲鳴。
風がざわざわと枝を鳴らす。
月が顔を出す。

ブンナ　ねずみさーん！……ねずみさーん……ねずみさーん。

11

ふたたび朝がやって来た。
土の中に寝ているブンナ。
ふと頭を上げる。何かが聞こえた。
誰かが泣いている。
ねずみだ。

ねずみ　情けないなあ……情けない……ちくしょう、……カエル君、おれは落ちた、落ちたけど運がよかったんだ、ちょうど柔かい土の上で、命だけは助かったよ、でもさ、動けなかった。朝までじっとしているしかなかった。そのうち疲れで……疲れていたんだ、おれは！　眠ってしまった。眠っちまったんだ！……気がついたら、あの悪魔のような執念深い鳶が、鳶のやろうが、おれを、またつかまえやがったんだ！　逃がすものかってさ、笑いやがった。……ちくしょう……おれは、やっぱり鳶に食われて死ぬ運命なんだ。バチが当ったんだ。おれは、おれは、すずめ君を、先に持って行ってくれなんて、鳶に頼んだんだ、情けない奴なんだ！　ああ！……

ブンナ　（顔を出し）　ねずみさん、そんな、そんなことはないよ。そんなことはないよ……

ねずみ　ほっといてくれよ！

ブンナ　ねえ、ねずみさん、泣かないで下さい、おねがいです。

ねずみ　早く、土にもぐってしまえ、そうしないと、おれは何をするかしれないぞ。おれは、力をつけようとして、君を食べようとするかもしれない。おれは、卑怯者だ！

ブンナ　ねずみさん、そんな、自分をさげすむのはやめて下さい。ねずみさんは、いいひとです。それはぼくがよく知っています。
ねずみ　下手な、なぐさめはやめてくれ。早く隠れろ！　行っちまえ！　おれをひとりにしてくれ！
ブンナ　……

バサバサバサとまた鳶の近づく羽音がする。

ねずみ　来た！　やっと来てくれた！　おれはもう死ぬんだ！　早く殺してくれ！

ブンナ、いそいで隠れる。
と、鳶はドサリと何かを投げおとしていってしまう。
蛇だ。
自分が助かったことに不思議な思いでそっと顔を上げたねずみは、蛇に気がついて、恐怖にとらわれ、必死にあとずさりする。

蛇　ねずみか……お前も鳶にやられたのか。……ふむ、すると、ここが……
ねずみ　食べないでくれ……食べないでくれよ……たのむよ。
蛇　目をあけてよくみろよ、口がさけちまってるだろ。食いたくても食えないよ。
ねずみ　……

蛇　どうしたんだ？　そんなにおれが恐いのか？　……どいつもこいつも、ひとを一体なんだと思ってるんだ。いつも、決まってこうだ。ひとを鬼か蛇(じゃ)のように見やがる。冗談じゃないよ。

ねずみ　……

蛇　どうしたんだよ？　おれだって冗談の一つや二つ言うんだぜ。もっと驚かしてやろうか。このおれだってなあ、親もいれば、子もいるんだぞ。……どうだ驚いたか。ちくしょうめ。今朝だってなあ、おれは子どもたちと一緒に寝てたんだよ、肌を寄せあってさ。ところが、ふと、にわとりの鳴き声を聞いたような気がしたんだ。それも、めんどりのだ。これは、てっきり卵を産んだにちがいない、そう思った。子供たちはまだ、にわとりの卵を食ったことがない。おれは、ふっとその気になって、子供たちに待ってろよと言って、お寺のにわとり小屋に出かけた。あったよ卵は。おれの思ったとおり、産みたての湯気の出てるような奴だ。そいつをスッポリとのみこんで、おれは、にわとり小屋の屋根に登った。判るか、なぜか。別に下界をちょっと見下ろしてみようと思ったわけじゃない、これは、おふくろが教えてくれた、われわれの知恵なんだよ。卵ってのは意外とかたくってね、のみこんだはいいが、腹の中で割れてくれないんだ、そのまんまなんだよ。そこで、高いところに登る、登って地面に腹から落ちるんだ。すると腹の中で卵が割れる。な、うまいやり方だろう、お前のようなしぶといねずみを呑みこんだ時もおなじだ、卵の場合よりはもっと高いところから飛ばないとダメだ。ちょっとばかり、こっちの腹も痛むが、なに、たいしたこっちゃない、腹の中のねずみは頭を打ってくたばる、そういうわけだ。で、卵を呑みこんで、小屋の屋根に登ったと思いなよ。そこを鳶の奴が見つけやがったんだ。ご親切なことに腹に穴あけて卵を割ってくれたよ。

ねずみ　……

蛇　笑ったな、お前、いま。
ねずみ　いえ、笑ったりなんか……
蛇　いいんだよ、笑っても。もっとも、あざ笑うのはやめてくれよな。嫌いなんだ。締め殺すぜ、そんな笑い方したら。
ねずみ　けっして笑ったりしません。
蛇　でもさ、そう、おどおどするなよ……食わないと言ってんだろ！　判んねえやろうだな、まったく。さっきから、ひとの顔を見て、おどおど、びくびくしやがって。食わないと言ってるんだから信用しろよ。……おれはつくづく情けない。生まれ落ちて卵のカラを破って外に出た時、おふくろはおれに言ったよ。これから死ぬまでの間、お前は誰からも嫌われるだろう、そのきれいな肌の色もはた目には気味悪いものと見られるだろう、身体の長く、くねくねと歩くのも厭がられるだろう。だが、それを哀しむな、お前にちっとも罪はない。しかし、おふくろは最後にちらっと気弱になったのか、いつも草の陰に隠れて、そっと音のしないようにお歩きなどと教えてくれた。お前らが、だから、音を立てずにそっと忍びよって襲ってくると言って、おれたちを非難するのは間違ってるんだ。おれたちは、ただ世の中に遠慮して、そっと生きてるだけなんだ。……ふふふ、ちょっとこれは、眉ツバだったかな。ふふ……
ねずみ　……
蛇　お前、いま、笑わなかったか。
ねずみ　笑いません。
蛇　……お前も何か話をしてみろ。
ねずみ　……

蛇　たとえば、おふくろさんの思い出なんかどうだ。
ねずみ　（首を横に振る）……
蛇　ないのか？　なんにも。……それとも、相手がおれだから厭なのか？……ひとをバカにするなよ。……
ねずみ　食べないで下さい……食べないで。
蛇　……どうせ鳶に食われる運命だろう。誰に食われたって、おなじことじゃないか。
ねずみ　ぼくを食べても、あなたもすぐ鳶に食われるんですよ。鳶の手間をはぶいてやるだけじゃないですか。だって、今度、鳶に連れて行かれるのは、ぼくの番です。そのぼくが居なくなったら、すぐにあなたの番になるんですよ。
蛇　いやなことを思い出さすな。おれだって鳶に食われるのはごめんだ。ちくしょう。……逃げる方法はないのか、ここから。
ねずみ　夕べ、月の明りで下へ降りようとして落っこちた、命はとりとめたけれど、動けないところを、また鳶に見つかっちまった、奴は執念深い。
蛇　降りようとして、この高さから落ちたのか？……それで生きてるとは、しぶといな。
ねずみ　昼間降りようとしてもダメだ。鳶の奴がちゃんと目を光らせている。
蛇　昼間もなにも、こんな高いところから、どうやって降りる？　普通じゃないんだ、おれの身体は。口もだが、腹と背中に穴はあいてるし、身体中打ち身でしびれちまってる。
ねずみ　おれだって折れた骨が腹の中で胃袋を突き破ってるし、足も折れている。それでもやってみたんだ。
蛇　……強いな……おれは恐い。落ちて死ぬのはいやだ。

ねずみ　……
蛇　お前、いま、おれを笑ったな。
ねずみ　笑やしないよ。
蛇　いいや笑った！　おれは、ひとに笑われるのは嫌いなんだ。……
ねずみ　……どうしようというんだ。……やめろよ、食わないって約束したじゃないか……やめてくれよ……
蛇　泣けよ、恐いなら泣けよ。おれは子供たちのところに帰らなくちゃいけない。体力つけて夜になったら、ここから降りるんだ。
ねずみ　口がさけてるんだろう？　やめろよ、おれは大きすぎる。……やめろ！　カエルがこの下にいるんだ。それを掘って食えよ。
蛇　……なに？

この時、雷が鳴る。

蛇　なんと言った？
ねずみ　……
蛇　なにがいるって？
ねずみ　……
蛇　カエルか？　……そういえば、におうな。カエルのにおいだ。この土の下か？　よし。じゃ、お前とおれ

とで半分ずつにするか。（においをかいで）どこからもぐったのかな……うむ、ここだ。ふふふふふ……。
お前、そこで待ち伏せしてろ、おれがこっちからもぐって追い出すからな。

蛇、土を掘ってもぐる。
ブンナ、どうしていいか判らない。
また雷鳴がとどろく。
ブンナ、土の上に飛び出す。
ねずみと顔を見合わす。
しばし見つめあう二匹。
蛇、笑いながら、土から出てくる。
ねずみ、ブンナを背後にかばう。

蛇　……どこへ行った？　飛び出したろう？
ねずみ　……
蛇　どうした？
ねずみ　……
蛇　なにをしている？　……そいつは、カエルだろう。お前、ひとり占めにするつもりか。
ねずみ　やめろ、われわれはどうせ死ぬんだ。助けてやるんだ。
蛇　なに？　……カエルがいるから、掘り出せといったのはお前だぞ。

ねずみ　うるさい！

雷鳴。

蛇　偽善者め！ 知ってるぞおれは。お前たちねずみが、冬眠しているカエルを掘り出しては、食いちらかしているのを。何も知らずに眠っている無抵抗のカエルをだ。助けてやるだと？ さんざ悪いことをしてきて、今になって、善人ぶるのか。笑わせるな！

ねずみ　なんとでも言え。おれは、このカエルの子を見殺しにするわけにはいかないんだ。

蛇　……よし。お前も一緒にほふってやる。

飛びかかる蛇。
雷鳴とともに雨が轟然と降りはじめる。
雨中の格闘。
ねずみは、力およばず、蛇に巻きつかれる。
ブンナは呆然と見ている。

蛇　どうだ！ 身のほど知らずのねずみめ！ ……死ね！

ねずみ　まだだ、……まだ死なんぞ……

蛇　こいつめ！

ねずみ　身体が穴だらけじゃないか。……力が足りないぞ……

蛇　それえ！……

ブンナ、蛇のシッポのあたりに食らいつく。

蛇　いたい！（とブンナをはじき飛ばす）

そのとき、ねずみは、するりと逃がれる。

蛇、今度はブンナをねらって飛ぶ。必死に逃げるブンナ。

蛇　逃げるな小僧！

と、飛びかかった蛇はいきおい余ってへりから落ちそうになって、やっとひっかかる。

そこに、ねずみが飛びかかり、追い落とそうとかかる。

蛇　おい、待て、よせ！やめろ！やめてくれ、助けてくれ、助けてくれ、悪かったよ、あやまる、食わないよ、やめてくれ！おれには、子供がいるんだ！家でおれの帰りを待っているんだ！落ちてしまうよ！やめてくれ！助けてくれ！死にたくないよう！ああ！

落ちて行く蛇。
雨の中、大きく肩で息をして立ちつくす、ねずみとブンナ。
ねずみ、やがて、ガックリと膝をつき、たおれる。

ブンナ　ねずみさん……ねずみさん……
ねずみ　……おれを軽蔑しないでくれよな、カエル君。おれは、自分が情けなくて……
ブンナ　大丈夫ですか……
ねずみ　いいんだ……これで、鳶に食われなくてすみそうだ……助かったよ……
ブンナ　そんな……
ねずみ　冷たい雨だな……冬になったんだぞ、カエル君……
ブンナ　ええ。
ねずみ　君はしかし、足がこごえて動けなくてもここにさいわい土がある。ここで春まで眠ればいい。
ブンナ　ええ。しかし……
ねずみ　大丈夫さ……冬眠に必要な食べ物はちゃんと、ここにある……
ブンナ　……？
ねずみ　おれだ。
ブンナ　……だって、ぼくは……そんな……
ねずみ　おれは、やがて死ぬ……鳶はもう来ない……何も心配することはない、……間もなく、おれの身体がくさってくると、小さな虫がたくさん生まれてくる……それが蛾になって……だから、君は生きのびら

れる。……カエル君、その光景がいまおれの目に見えるようだ。……おれは君が生きのびるために死ぬんだ、おれの身体から、小さな虫がたくさんたくさんはいでて、それが蛾となり蝶となって。ほら、見えるだろう。カエル君、蝶や蛾があまりきれいだからと言って、かわいそうだと思ってはいけないよ、食べなくちゃね。食べて、生きて行かなくては。……だって、おれは、死んで、君が生きるのに役立つのが嬉しいんだから。おれの身体を食って生まれた蝶や蛾も、おれの気持を判ってくれるはずだ、そうだろう？だから、遠慮しないで、喜んで食うんだよ。……そしたら、おれが、君になるわけだろう。生まれ変りだよ。素敵じゃないか。……それじゃ、かえる君、さようなら。

そう。死んで横たわった、ねずみの身体から、美しいたくさんの蝶や蛾が次次と舞い飛ぶ。

12

ガラスの中のブンナたち。

ブンナ　七日間も降りつづいた雨がやむと、やがて、ねずみさんの言ったとおり、その体から小さな虫がたくさん生まれて、それが蝶や蛾となって飛びはじめた。それは生まれて初めて見るような素晴らしい光景だった。ぼくたちカエルが死ぬと、干からびて枯葉のようになって、蟻がたかるのがせいぜいだ。死骸から蝶や蛾が生まれるなんて、あのねずみさんが、きっと生きていた時によいことをしたからにちがいない、そう思った。椎の木のてっぺんに間もなくほんとうの冬がやってきた。寒くて降りられなくなったぼ

くは、土にもぐって眠った。冬の間中、その上には真白い雪がふっくらと積もったにちがいない、長い眠りの中で、ぼくはその雪の帽子を夢に見た。

子ガエル３　そして春まで眠ったのか……

ブンナ　目がさめて、すぐ降りたんだ。あと少しで地面につくはずのところで……

子ガエル３　つかまったか。

ブンナ　ばかな話だ。

子ガエル３　しかし、よく生きていたなあ。

ブンナ　うん、よかった、会えてよかった。あのまま、あの木の上で死んでいたらと思うと……ほんとによかった。

その時、子供たちがくる。

声１　で、どれにする？

声２　どれったって、どれでも同じだろ。

声１　この細くて、のそのそした奴にするか、やりいいだろう？

声２　そうだな。じゃ、そいつに死んでもらうか。

声１　勉強のためだからな、うらむなよ。

と、老ガエルをつかみ上げる。

声２　どうせ、あさってはみんな死ぬ。

声１　あと、このまま置いといて大丈夫か。

声２　逃げやしないとして、死にはしないだろうな。

声１　弁当の残りでもやっとくか。

声２　そうするか。

子供たち、去る。

じっと見送るブンナたち。

老ガエルの声　みんな、あきらめるんじゃないぞ！

子ガエルもう一度、ガラスにぶつかってみる。もちろん割れはしない。

みな、力つきた思いで、そこにへたりこむ。

子ガエル２　だんだん、力がなくなってく。もう肩ぐるまだって出来ないぞ。あの時、すぐにやっていれば、うまくいったかもしれない。

子ガエル３　うまくいって、一人か二人は逃げられたとして、下になった者はあとに残されてしまう。どう

するつもりだったんだ？ 考えたのか、それを。
子ガエル２　……
子ガエル３　どうする？ ブンナ。
ブンナ　まだ、時間はある……
子ガエル２　雨なんか降りやしないよ。……もうだめだよ。

その時、めしツブが一塊投げこまれる。

ブンナ　みんなで分けて食べよう。
子ガエル２　ちょっとだな。
ブンナ　しょうがないさ。
子ガエル２　力つかないぜ。
子ガエル３　いいことがある。
子ガエル２　ジャンケンするのか？
子ガエル３　ちがうよ。
子ガエル２　一人占めしようというんじゃないだろうな。
子ガエル３　ぼくじゃないよ。ぼくはいらない。
子ガエル２　いらない？ じゃ……
子ガエル３　全部ブンナにやるんだよ、食べてもらうんだ。

子ガエル２　なんだって？
ブンナ　だめだよ、それは。
子ガエル２　冗談じゃないよ。こっちだって腹ぺこだぜ。
子ガエル３　聞けよ。三人で分けたら、一人あたり、ほんの少しだ、なんにもならない、だけど、一人で食えば十分の量だ。だからブンナに食ってもらう。ブンナはわれわれのうちで一番ジャンプ力がある。腹がへっているいまはダメでも、全部食えば、これを、飛びこえられるかもしれない。そうだろう？……ぼくたちが踏み台になる、それでどうだ？
ブンナ　やってみよう。
子ガエル２　ブンナ一人逃げて、われわれはどうするんだ？
ブンナ　ぼくが外に出たら、石を持ってきて、思いきりぶつける。割るんだこのガラスを。
子ガエル３　よし決まった。

ブンナ、むしゃむしゃと、めしツブの塊を食う。

子ガエル２　でも、失敗したらどうする？
子ガエル３　やるんだよ。
子ガエル２　失敗したら、丸ぞんだよ。うまそうだな。
子ガエル３　いま食って一日生き長らえたって、なんにもならないじゃないか。それより賭けてみるんだよ、ブンナのジャンプに。

子ガエル２　跳べるかな。
子ガエル３　跳べるよ。
子ガエル２　きっとか。
子ガエル３　きっとだ。
子ガエル２　うまそうだなあ……

ブンナ、食べおわる。

子ガエル３　どうだ、力が出たか？
子ガエル２　早すぎるよ、そんな。
子ガエル３　力が足のほうに回っていかないか？
ブンナ　うん、だんだん、足に力が回ってくる。
子ガエル２　ほんとうか？
ブンナ　ほんとうだ。もうちょっとだ。
子ガエル２　……まだか？
ブンナ　もう少し。
子ガエル２　まだか？
ブンナ　いま少し。
子ガエル２　まだか？

ブンナ　あと少し。
子ガエル２　待てないよう。
ブンナ　よし。行くぞ。
子ガエル３　じゃ、ぼくたちは、うずくまって踏み台になろう。さあ。
子ガエル２　あんまり強く蹴らないでくれよな、腹ぺこなんだから。
子ガエル３　だめだよ。遠慮なくやってくれ。
ブンナ　よし。行くぞ。
子ガエル３　やれ！

ブンナ、気息をととのえ、助走をすると、踏み台を蹴って飛ぶ。
みごとブンナは飛びこえた。

子ガエル３　やった！やったぞ！
子ガエル２　ブンナ、ぼくたちを見捨てるなよ！……大丈夫だろうな……

ブンナ、石をかついで戻ってくる。

子ガエル２　ブンナ！
ブンナ　行くぞ！あぶないから離れてろ。……それ！

ブンナ、石をかかえて、ガラスに頭からぶつかる。
ガラスの砕ける音。

春　五月　青空
風そよぎ　水ぬるむ
泳げ　唄え　遊べ
きょうという日は二度とない

春五月　青空
蝶は舞い　雀さえずる
泳げ　唄え　遊べ
きょうという日は二度とない

春五月　青空
あらたな母にあらたな子
泳げ　唄え　遊べ
きょうという日は二度とない

〈完〉

底本：『ブンナよ、木からおりてこい《新版》』新水社
1980（昭和）年5月15日　第一刷
1987（昭和）年5月1日　第五刷